

人間文化研究機構
 基幹研究プロジェクト
 アクティビティレポート



NIHU TRANSDISCIPLINARY PROJECTS



2016→2018



ACTIVITY REPORT



ごあいさつ

人間文化研究機構（以下「人文機構」という）は、「人間文化研究」のもとに結集する文理の300名を超える国内最大級の研究者集団です。その設立以来、学術専門分野・社会・慣習の壁を越えて人間の蓄積してきた知識・伝統を創造的に再構築し、真に豊かな生活の実現に向けて、問題解決を志向する「人間文化研究」の新しいパラダイム提唱を任務と考えてきました。とりわけ、科学技術イノベーションを活用して未来を形作ろうとする試みが昨今進められていますが、そのありかたを考えると、人間の幸福の量や質、あるいは社会的公正や格差といった、普遍的で根源的な問題に係る「人間文化研究」の学術的蓄積を生かすことが必要不可欠です。

そこで、2016年度から始まった第3期中期目標・計画期間では、人文機構を構成する6つの機関と国内外の大学等研究機関、さらに地域社会・産業界等と連携する新たな研究システムを構築し、現代的課題の解明に資することを目指した17の「基幹研究プロジェクト」を立ち上げました。基幹研究プロジェクトは、各機関における中核的な課題を扱う「機関拠点型」、専門分野を超えて広く学際的な協同により新たな融合的な研究を進める「広領域連携型」、北東アジア、現代中東、南アジアという地域研究や、欧米にある日本関連資料に関わる研究を、国内外の大学等との組織的

な連携に基づいて進める「ネットワーク型」の3つの類型で構成されます。6つの機関に蓄積された多様な研究資源やネットワークを生かしながら、国内外の大学等研究機関はもちろんのこと、地域社会や産業界等さまざまな方々との連携を行いながら、ともに新たな知の構築に向けて取り組んでいます。

プロジェクトの研究成果は、学術論文や学会発表を行うとともに、出版・データベース・映像および展示の制作等さまざまな手法・メディアによって、国内外に広く発信しています。また、大学における新たな教育プログラムの開発や、専門性とマネジメント力を備えた若手研究者の育成にも寄与しています。

この『アクティビティレポート』では、第3期中期目標・計画期間の前半期に当たる2016年度から2018年度までの得られた成果について実施した、外部の専門委員による評価において、優れているとされた取り組み・成果を取り上げて紹介しています。

広く皆様からのご意見等をいただくことでさらに研究を推進させるとともに、新たな展開の可能性を広げていきたいと思えます。

「人間文化研究」のさらなる挑戦に、一層のご助力をお願い申し上げます。

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構長
平川 南

プロジェクト構成

機関拠点型基幹研究プロジェクト

p 3

総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築	国立歴史民俗博物館（歴博）
日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワークの構築	国文学研究資料館（国文研）
多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓	国立国語研究所（国語研）
大衆文化の通時的・国際的研究による新しい日本像の創出	国際日本文化研究センター（日文研）
アジアの多様な自然・文化複合に基づく未来可能社会の創発	総合地球環境学研究所（地球研）
人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築	国立民族学博物館（民博）

広領域連携型基幹研究プロジェクト

p 5

日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築	歴博、国文研、国語研、地球研、民博
アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開	国文研、地球研、民博
異分野融合による「総合書物学」の構築	歴博、国文研、国語研、日文研

ネットワーク型基幹研究プロジェクト

p 9

世界における日本や社会・文化を考える上で重要な課題を掲げ、国内外の大学等研究機関とネットワークを形成し、多様な分野を横断する総合的な研究に取り組みます。ネットワーク型基幹研究は、「地域研究推進事業」と「日本関連在外資料調査研究・活用事業」から構成されます。

○ 地域研究推進事業

北東アジア地域研究	民博、協定締結大学 (各大学の詳細は、14 ページをご覧ください)
現代中東地域研究	民博、協定締結大学
南アジア地域研究	民博、協定締結大学

○ 日本関連在外資料調査研究・活用事業

ハーグ国立文書館所蔵平戸オランダ商館文書調査研究・活用	日文研
ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用 — 日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築 —	歴博
パチカン図書館所蔵マリオ・マレガ収集文書調査研究・保存・活用	国文研
北米における日本関連在外資料調査研究・活用 — 一言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築 —	国語研
プロジェクト間連携による研究成果活用	日文研

活動データ、ネットワーク型地域研究 各研究拠点

p 13



歴博

総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築



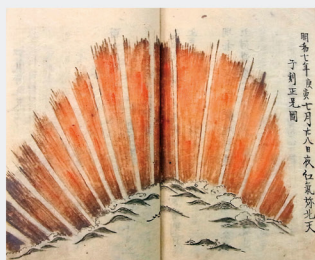
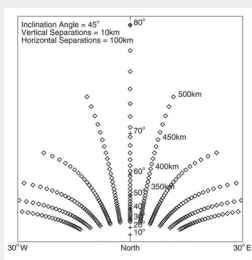
khirin <https://khirin-ld.rekihaku.ac.jp/>

国立歴史民俗博物館では「総合資料学の創成」を掲げ、歴史資料のデジタルネットワークを基礎に、歴史学と関連分野の融合研究を推進しています。歴史資料の文理融合型情報基盤のデータインフラとなるシステム(khirin)を構築したほか、これまでに4冊の書籍を出版しました。とりわけミシガン大学出版からは電子論文集を刊行し、古文書の和紙の文化財科学的分析や小判の金属性質分析などの事例、データインフラ構築の状況などの異分野連携の成果を日英両言語で掲載しました。

また、『歴史情報学の教科書』という電子書籍も出版しました。特に人文情報学に関わる部分をわかりやすく展開したもので、これから人文情報学を学ぶ若手研究者に向けて作られています。これらの電子書籍は、誰もが自由に閲覧できるオープンアクセスで公開されています。

国文研

日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワークの構築



左・1770年9月に京都から見たであろうオーロラの形を再現した結果
右・松阪市郷土資料室所蔵「星解」に描かれた1770年9月のオーロラ

30万点の画像を公開する「新日本古典籍総合データベース」の構築と国際共同研究等を推進する本計画では、国立極地研究所との異分野融合研究において、『明月記』等の記述から、平安・鎌倉時代における連発巨大磁気嵐の発生パターンを解明し、アメリカ地球物理学連合の査読付き学術誌 Space Weather に掲載されました(2017年3月)。さらに同年9月、江戸時代のオーロラ絵図と日記から、観測史上最大の磁気嵐と言われてきた「キャリントン・イベント」を凌ぐ史上最大の磁気嵐と推定された研究成果が再び同誌に掲載されました。

これらの研究成果は、資料を読み解く国文学者と解析する天文学者との協働により生まれた、1,000年のスケールで磁気嵐の発生の見通しを提供するもので、社会・経済・安全保障等、広い範囲で大きな意味を持つ特筆すべき成果です。

国語研

多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓



収録されている映像データ

2018年度に公開した『日本語日常会話コーパス』(モニター版)は、実際の日常会話を大規模に収録した世界初のコーパスです。日常会話は最も身近なコミュニケーションでありながら、データの整備が困難でしたが、このコーパスでは音声や文字化テキストに加え映像まで収録・公開しており、これは世界初の試みです。

視線・身振りなども含めた様々な角度からの会話研究が可能になるとともに、音声認識などの情報処理や対話システムなどの人工知能の技術開発にも応用可能なデータとして、学界・産業界の双方から注目されています。2022年度の本公開では200時間分のデータを公開する予定ですが、モニター版(50時間分)を公開してから1か月半で、IT企業等を含む150件超の利用申請があるなど大きな反響がありました。

6つの機関が、それぞれのミッションを体現する重点的な研究テーマを掲げ、国内外の研究機関や研究者と連携し、専門分野の深化を図る挑戦的な研究に取り組みます。

日文研

大衆文化の通時的・国際的研究 による新しい日本像の創出



左・大衆文化研究プロジェクト総合国際シンポジウム チラシ 右・「大衆文化研究国際ワークショップ・シリーズ講座 IN 北京」の様子（北京外国語大学日本学研究センター）

これまでの主な活動として、プロジェクト3年目の総括である大衆文化研究プロジェクト総合国際シンポジウム「メディアミックスする大衆文化」の開催（2018年度）、清華大学、国際交流基金、北京外国語大学、北京師範大学との共催による「大衆文化研究国際ワークショップ・シリーズ講座 IN 北京」（アカデミック・プログラム及び教育プログラム）の実施（2018年度）があげられます。

また、各チームを横断した日本大衆文化の教科書制作プロジェクトを立ち上げ、教科書試作版の制作や海外での模擬授業の実施に取り組んでいます（2017年度より）。「日文研コレクション描かれた「わらい」と「こわい」展—春画・妖怪画の世界—」（京都市・細見美術館、京都新聞と共催）などの展覧会事業も行っています。

地球研

アジアの多様な自然・文化複合 に基づく未来可能社会の創発



左・年輪コアの採取 右・フィリピンにおける地下水調査（撮影：上原佳敏氏）

多様な自然、文化、価値観、世界観を有し、急速な経済成長の一方で地球環境問題のホットスポットであるアジアを対象に、異分野融合、課題解決志向による時限の大規模国際プロジェクトとして行っています。実施に際して、学術コミュニティだけでなく、行政等の多様なステークホルダーと密に連携しています。

その一つでは、樹木年輪の酸素同位体比を用いて、古気候データとして世界最長である約5,000年間に及ぶ降水量の年単位の復元に世界で初めて成功し、そのデータと史・資料と比較することで気候変動が日本の歴史に与えた影響を解析しました（2018年）。

これらのプロジェクトはアジアの他、世界各地をフィールドとして展開しており、そのネットワークを活用して国際的な研究拠点として機能しています。

民博

人類の文化資源に関する フォーラム型情報ミュージアムの構築



データベースを活用したソースコミュニティにおける文化継承の取組：徳之島西阿木名小中学校での「徳之島の唄と踊り」データベースの活用

世界的規模の多様な文化資源に関する多言語・マルチメディア対応のデータベースの構築を目指し、これまでに38,744件（603,098レコード）の資料情報を精査し公開（一般・館内）しました。文字情報だけでなく、写真や動画といったマルチメディアコンテンツを備えた学術資料のデータベースは世界的に見ても類例がなく、その学術的・社会的・国際的意義は非常に高いと言えます。

また、構築したデータベースを活用した国際共同研究、国際連携展示を国内外の研究機関や大学、博物館および文化の担い手である現地ソースコミュニティとのパートナーシップのもとで実現する等、人類学の知の往還の最先端での研究活動を展開しています。



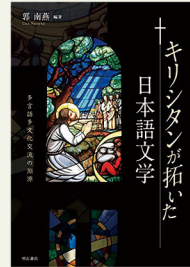
広領域連携型 基幹研究プロジェクト

異分野融合による新領域創出

異分野融合による「総合書物学」の構築

日本の人文学における「宣教師による日本語文学」という新ジャンルの開拓

16世紀のザビエルから近代の宣教師に至るまで彼らの普及活動は多文化融合の実践であり、実は宣教師たちが日本語で著述した膨大な作品を残していることを発見し、論文集『キリシタンが拓いた日本語文学』（2017年9月）、単著『ザビエルの夢を紡ぐ』（2018年3月）などの刊行や国際ワークショップ「キリシタン文化の継承」（2017年8月）の開催などを通して、「宣教師による日本語文学」という新しいジャンルを切り拓きました。



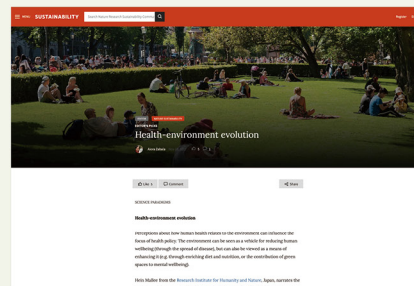
左・論文集『キリシタンが拓いた日本語文学—多言語多文化交流の淵源』
右・ヨーロッパ日本研究協会国際会議 (EAJS) でのワークショップの様子 (リスボン大学)

アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開

「健康」という概念の定義に対する環境学からのアプローチ

本プロジェクトのリーダーが人文科学の視点から日本におけるエコヘルス研究の考え方や重要性について述べた論文“The evolution of health as an ecological concept”が、インパクトファクター5以上の理系研究を中心とする国際誌 Current Opinion in Environmental Sustainabilityに掲載されました(2017年4月)。

そして、本論文は学術誌 Nature Sustainability の編集者から「『疾病が消滅すれば人間は健康だと言えるのか』という新たな疑問を投げかけた」と高い評価を受けました(2017年11月)。



<http://go.nature.com/2i4ByX>

日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築

新たな「地域文化」創生論の構築

地域社会の変貌や災害により地域の多様性が失われつつあるなか、地域はさまざまな問題に直面しています。本プロジェクトでは言語・史料・表象システム・環境等の保全を総合的に捉えることにより、地域文化の創生に寄与する新しい理論の構築に取り組んでいます。活動の内容はブックレット『新しい地域文化研究の可能性を求めて』シリーズとして、2018年度までに8巻を刊行しました。これは地域の振興にも役立てられています。



歴史、文学、言語、地域研究、環境等の専門分野を擁する機構の6機関が協業して、国内外の大学等研究機関や地域社会と連携し、新たな人間文化研究システムを構築するとともに、異分野融合による新領域創出を目指します。

異分野融合による「総合書物学」の構築

人文学から広がる異分野連携 歴史学と水産学による古代の食品についての協働研究の展開

古代日本の法制書『延喜式』を「古代の百科全書」として捉え、人文情報学や食品学・植物学・考古学など諸分野の研究者と協働体制を築いて、古代の知識と技術の現代的な活用など新たな視点に基づいた研究を実践しています。

2018年度には水産学研究者とともに従来の文献史学にはない研究アプローチから食品関連の研究の展開をはかり、日本水産学会というこれまでの歴史学の分野にとどまらない学会において発表を行いました(2019年3月)。



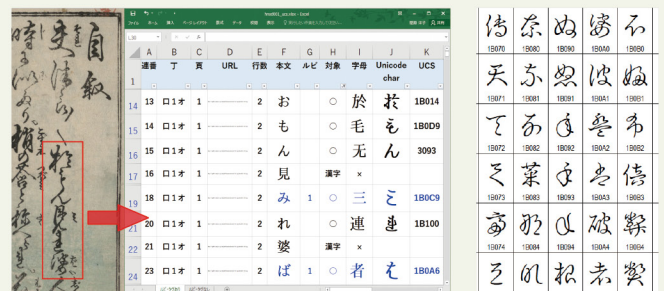
左・土御門家旧蔵『延喜式』全50巻(国立歴史民俗博物館所蔵)
右・東京医療保健大学の協力を得て行ったアワビの加工実験

異分野融合による「総合書物学」の構築

情報学と書物学の融合 Unicodeへの変体仮名収録と変体仮名フォントの作成・公開

本プロジェクトの提案により、変体仮名286文字が国際文字コード規格“Unicode 10.0”、“ISO/IEC 10646:2017/Amd 1:2019”に収録され、これを受けて2018年12月には変体仮名をPC上で表示するフォントも作成・公開されました。

このように、情報処理学分野と日本語学分野の研究者による密接な協働の結果、国際的な共通の研究基盤が整備され、各種管理データにおける文字利用の範囲が拡充されています。

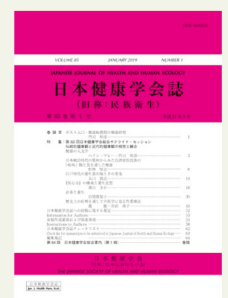


左・変体仮名にコードを割り当てる作業 右・Unicodeに収録された変体仮名

アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開

日本健康学会誌の特集 伝統的健康観と近代的健康観の相克と融合

本プロジェクトを構成する環境学・歴史学・文化人類学の3ユニットが共同企画した日本健康学会における特別セッション(2018年3月)の成果に基づいて、同学会誌の特集『伝統的健康観と近代的健康観の相克と融合』を執筆・編集し、学際研究の成果を「健康」「疾病」「養生」などをテーマとする7本の論文にまとめ、公開しました(2019年1月)。



国際連携

アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開

国際シンポジウム 第1回アジア・エコヘルス研究フォーラム

2018年11月に中国・海南省において現地の疾病予防管理センターと共催した国際シンポジウム「第1回アジア・エコヘルス研究フォーラム」には、日本国内の他、中国・ラオス・ベトナム・タイ・カンボジア・フィリピンの大学など研究機関・政府機関・国際機関・NGOなどから150名を超える参加者が集い、海外との共同研究を推進する体制が整備されました。



「エコヘルス研究フォーラム」におけるプロジェクトリーダーの発表

アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開

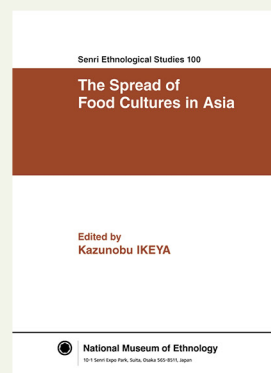
食文化研究や養生研究の国際化

2016年12月に開催したThe 6th Asian Food Study Conference、「食の交流史」分科会の論文集であるSpreading Food Cultures in Asia: From the Past to Present (Senri Ethnological Studies 100)を2019年3月に刊行しました。

また、2019年1月に北京において国際シンポジウム「東亜医学と本草学古籍」を、そして2019年3月に民博において国際シンポジウム“Making Food in Human and Natural History”を開催するなど、国際的な研究連携への取り組みを実施したことによって、日本における食文化研究や伝統的な東洋養生研究の国際化への途を開きつつあります。



国際シンポジウム「東亜医学と本草学古籍」



日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築

国際シンポジウム 市民とともに地域を学ぶ

2018年11月に東京で開催した国際シンポジウム「市民とともに地域を学ぶ—日本と台湾にみる地域文化の活用術」では、台湾から基調講演者を招き、博物館の運営に地元住民がどう関わってきたかについて講演と討論を行いました。台湾と日本の比較を通じて、国際的な視点として、自然災害の発生条件が似た環境をもつ地域において情報を共有していくことの重要性、特に東アジア諸国との国際的な研究成果の共有の必要性を確認しました。



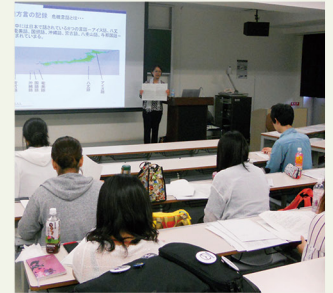
大学・地域との連携

日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築

鹿児島大学や弘前大学との連携講座

本プロジェクトでは、地域文化の魅力を発見・発信し、地域振興を担う若手人材を育成するために、大学と連携して授業を行っています。

2018年度は鹿児島大学大学院人文社会科学部と共同で「島嶼政策特論」の授業を、弘前大学人文社会科学部と共同で「地域文化振興論」「地域文化振興実習」の授業を実施しました。授業では文化資源の発見と活用、災害と資料保存、博物館の役割等をめぐって、受講生と活発な議論が行われました。



左・鹿児島大学における授業の最終回を一般に公開 右・弘前大学における連携授業の様子

日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築

モバイルミュージアムの教材としての活用

弘前大学において、展示キット「モバイルミュージアム」を教材として活用して授業を行いました。この展示キットは、本プロジェクトが収集した民俗や方言に関するデータを用いて「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」が制作したものです。学生からは、地域文化振興に対するイメージが深まった、卒業論文のテーマとして地域文化振興とその発信を取り上げようと思うといった意見が寄せられ、大きな反響を呼びました。



弘前大学において展示したモバイルミュージアム

日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築

研究映像『モノ語る人びと 津波被災地・気仙沼から』

『モノ語る人びと 津波被災地・気仙沼から』（2018年3月）は、東北地方太平洋沖地震の被災地での物質文化の保全・調査研究活動を記録し、過程を可視化した映像です。映像では人々がモノに触れて過去の記憶をたどる営みに注目しました。

この映像は歴博ユニットが確立をめざすアクション・リサーチの手法の一つで、上映会を通じて地域文化の継承に関わる課題を学生や各地の住民と共有し議論する題材として活用し、反響を呼んでいます。



2018年10月、熊本大学において上映会を開催



ネットワーク型 基幹研究プロジェクト 地域研究推進事業

統合的な地域研究を目指して

複数の課題の統合する 国際シンポジウム



2018年9月に、国立民族学博物館において全研究拠点が参加する形で開催された国際シンポジウム「北東アジアにおける地域構造の変容：越境から考察する共生への道」では、各拠点における研究成果について既存の国境や学問分野を越える形で議論が展開されました。その結果、環境と生業の多様性、歴史的にみた王朝や社会主義体制の存在に象徴される北東アジア地域の特異性が明らかとなりました。

北東アジア地域研究

地域研究プロジェクト間の 連携研究会



ムンバイの「イラン人街」

2018年12月、国立民族学博物館において「コスモポリタン都市ムンバイ：パールシーとイラーニーから」という全体テーマのもと、NIHU ネットワーク型基幹研究プロジェクト間の連携研究会を開催しました。南アジアと中東という異なる地域を対象とする研究者が一つのテーマについて議論を交わすこの研究会は、研究手法の国際性を強化する取り組みとなっています。

南アジア地域研究・現代中東地域研究

音楽から 多文化共生を考える レクチャーコンサート



2019年3月に、レクチャーコンサート「中東と日本をつなぐ音の道（サウンドロード）：音楽から地球社会の共生を考える」を、奈良の東大寺総合文化センターで開催しました。このイベントでは、東大寺長老による「大仏開眼と音楽」と題した特別講演の実施だけでなく、ワードやサントゥール、尺八などの演奏家とも協働し、日本の楽器のルーツや地域における多文化共生について市民と共に考える、新たな試みを行いました。

現代中東地域研究

国際的研究ネットワークの形成

アジアにおける 南アジア地域研究 コンソーシアム



ACSAS の連携拠点の図

南アジア地域研究の国際化・ネットワーク化などを通じた活性化に資するために設立された「アジアにおける南アジア地域研究コンソーシアム (ACSAS)」の第1回と第2回の国際シンポジウムは、2017年度にタイ、2018年度に韓国の大学と共催の形で、それぞれタイ、韓国で開催されました。2019年度はシンガポールにおいて第3回国際シンポジウムが開催される予定です。

南アジア地域研究

INDAS 全体 国際シンポジウム



ネパールにおける2017年度
INDAS 全体国際シンポジウム

INDAS 全体国際シンポジウムは、それぞれ「持続的発展」「平和的発展」「包摂的発展」を主題として各年度に開催され、多数の参加者のもとで新たな知見の提示につながる貴重な報告がなされています。英国のRoutledge社から出版予定の英文成果論集は、学術的意義とともに日本における南アジア研究の国際的発信成果として大いに期待されています。

南アジア地域研究

日本の文化、社会、政治、経済、環境にとって重要であるにもかかわらず、総合的な研究が十分でない3つの地域を対象に調査研究を行い、日本と対象地域間の相互理解を促進します。

次世代人材の育成

「南アジアセミナー」による若手育成



2017年度南アジアセミナー

各拠点に配属された拠点研究員によって企画・運営される「南アジアセミナー」は、毎年1回開催され、南アジア研究者による講義や大学院生・PDの研究発表などが行われます。成熟した研究者＝若手（次世代）研究者＝研究者の卵という3層構造の中で、中間に位置する若手研究者（拠点研究員）がイニシアティブを発揮することで、セミナーに参加する大学院生・PDの人材育成のみならず、拠点研究員自身の成長もねらった取り組みです。

南アジア地域研究

中東研究世界大会における若手研究者によるパネル発表



2018年7月にスペインで行われた「第5回中東研究世界大会(WOCMES)」において「宗教実践」「聖地巡礼」「中東文学」「アイデンティティ」「公共圏」というテーマのもと5つのパネルを組織しました。各拠点の若手研究者が国際会議で発表する機会に挑戦するだけでなく、国内外の若手研究者間のネットワーク形成にも役立ちました。

現代中東地域研究

国内外への発信

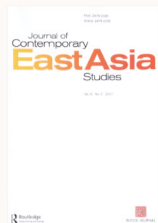
中東・イスラーム文化の入門書の刊行



『大学生・社会人のためのイスラーム講座』『「サトコとナダ」から考えるイスラーム入門』（共に2018年）といった、中東・イスラーム文化を学ぶ一般の学生や市民におおいに役立つ入門書を刊行しました。分担執筆者の多くも若手研究者であり、研究成果の公表という意味でも、またその社会への還元という意味でも、よい効果をもたらしました。

現代中東地域研究

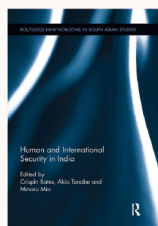
Journal of Contemporary East Asia Studies



本プロジェクトの拠点の一つである早稲田大学現代中国研究所の英文雑誌 Journal of Contemporary East Asia Studies (JCEAS) は、英国 Routledge 社により年2回刊行しているオープンアクセスの学術誌です。本誌の刊行によりプロジェクトの研究成果を広範かつ継続的に英語で発信することが可能となり、日本と諸外国との研究者との知的プラットフォームの構築にも寄与しています。

北東アジア地域研究

Routledge New Horizons in South Asian Studies



日本の南アジア研究は多様な分野で活発に行われてきましたが、ユニークな知見が海外に伝わりにくい状況にありました。本叢書はそれを補い、「現代インド地域研究」「南アジア地域研究」プロジェクトの成果を国際的に問う媒体として始められました。今年度以降も、INDAS 全体国際シンポジウムの成果をまとめてシリーズの続編を刊行する予定です。

南アジア地域研究



国際連携を通じた新たな日本文化研究のモデル構築

パチカン図書館所蔵マリオ・マレガ収集文書調査研究・保存・活用

アーカイブズ学・保存科学・歴史学を融合したキリスト教の伝来と受容に関する研究



本プロジェクトは、キリシタン文書史料群の精密な調査・整理目録作成・保存修復活動といったアーカイブズ学的研究を基礎として、それらの史料を用いた歴史学的な研究において精緻な成果を生み出しています。また、2016年12月にパチカン図書館で開催した「マレガ文書の保存と修復ワークショップ」などの取り組みを通して、海外のアーキビストに修復技術を伝える活動も行っています。

イタリアにおける「くずし字解読講座」の開催



2018年12月、発見されたキリシタン文書を教材とするくずし字解読講座をイタリアのローマ大学やナポリ大学において実施しました。同時にこれらの大学と連携しながらくずし字解読の授業法や教材開発研究を進めるなど、海外において日本研究を行う学生に対する教育や大学教員への指導法の伝達といった、研究者養成に貢献する取り組みを行っています。

ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用

海外の研究機関などとの連携によるシーボルト事件の新たな資料発見



左・シーボルト事件で没収された地図の写し Brandenstein-Zeppelin Family Archives
右・シーボルト収集資料の調査

本プロジェクトは、研究交流協定を結ぶシーボルト末裔家において長年、調査研究を実施してきました。なかでも、シーボルト事件においてシーボルトが国外に持ち出そうとしたものの幕府に没収されてしまった地図の詳細は、長年推測の域を出ませんでした。調査研究の過程で、これを裏付ける重要な資料を発見し、学界における百年越しの課題解明に結実しました。

英国において地域と連携しながら日本文化を紹介する展覧会を開催



現地の民間企業、各種団体との交流を図り地域と連携しながら、2018年6月から9月にかけて英国ウェールズ国立博物館において国際連携展示「KIZUNA: Japan | Wales | Design」展(邦題:「今・昔日本のアート&デザイン」)を開催しました。同展示は、チャールズ皇太子も鑑賞されるなど現地において好評を博し、多くの来場者(58,535名)を得て、海外における日本研究や日本文化理解の促進に寄与しました。

欧米にある日本関連資料の中には、現地の日本文化研究者の不足や個人所蔵であることから、所在情報や資料価値の把握がされていない貴重な資料が多数存在します。本事業はこうした文書、音声、実物資料を含む多様な資料の調査研究を進めると同時に、その成果を国内外で活用し、海外における日本研究者育成や日本文化理解を促進します。

ハーグ国立文書館所蔵平戸オランダ商館文書調査研究・活用

ハーグ国立文書館やライデン大学との学術交流協定に基づく国際的共同研究



左・ハーグ国立文書館との学術交流協定締結
右・ライデン大学との学術交流協定締結

本プロジェクトは、海外学術機関との密接な協力体制によって様々な成果を挙げています。例えば、ハーグ国立文書館との連携により、江戸初期の対外関係史研究にとって情報の宝庫である、平戸オランダ商館関連文書のデータベース化に向けて研究対象の全史料のスキャン撮影を行いました。また、ライデン大学から東インド会社日本関係文書を専門とする研究員を毎年招聘し、平戸オランダ商館文書の解読分析を共同で行い、その成果を国内外で発表しました。

北米における日本関連在外資料調査研究・活用

大学と連携した若手育成と、企画展示による成果発信



2018年度の龍谷大学農学部で開講された演習において、本プロジェクトが収集したハワイの日系史についての資料が使用されました。そして、この授業の履修生のうち2名がハワイのコーヒー農園での農業研修に参加し、卒業論文を作成しました。また、2019年度は10月より12月まで、国立歴史民俗博物館において企画展示「ハワイ：日本人移民の150年と憧れの島のなりたち」を開催し、研究成果を公開しました。

プロジェクト間連携による研究成果活用

「国際海洋都市」の新たな可能性にフォーカスを当てたシンポジウムを開催

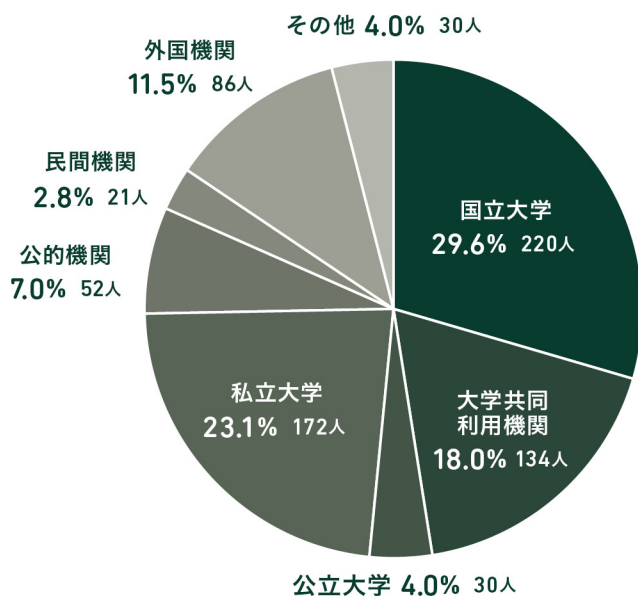


2019年2月、長崎県平戸市において国際シンポジウム「国際海洋都市平戸と異文化へのあこがれ—在外資料が変える日本研究—」を開催しました。各在外資料調査研究プロジェクトの代表者や班員のみならず平戸市、松浦史料博物館、平戸オランダ商館などと共催し、開催地地元の研究者、自治体職員、地元の専門家も登壇するなど本連携プロジェクトの発表・普及の場を創り出し、社会連携、地域連携に大いに貢献しました。

活動データ

平成30年度人間文化研究機構IRに係る基礎データから引用

共同研究者の参画状況

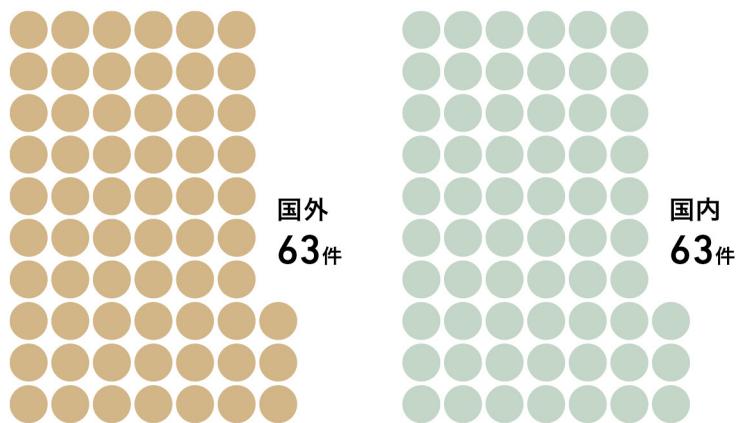


共同研究者の主な所属機関

東京大学	42名
京都大学	32名
東京外国語大学	26名
早稲田大学	18名
上智大学	15名
東北大学	14名
龍谷大学	12名
立命館大学	10名
北海道大学	9名
秋田大学	8名

参画共同研究者上位10機関

学術交流協定の締結状況



主な学術交流協定先

国外

北京外国語大学北京日本学研究中心
ブータン王立大学自然資源大学
イラン国立博物館
ブリティッシュコロンビア大学人類学博物館
サレジオ教皇庁立大学
ミュンヘン五大陸博物館
ベルリン国立図書館

国内

秋田県能代市
愛媛県西条市
宮崎県東臼杵郡椎葉村
国立国会図書館
東京都江戸東京博物館
大学共同利用機関法人情報・システム研究機構
(データサイエンス共同利用基盤施設)

地域研究推進事業に関する協定締結大学は次項参照 →

研究成果を活用した展示の開催状況



代表的な展示会場

弘前大学
静岡文化芸術大学
臼杵市歴史資料館
大阪市立中央図書館
岐阜市長良川うかいミュージアム
ウェールズ国立博物館
ビショップミュージアム(ハワイ)

ネットワーク型地域研究推進事業 各研究拠点（協定締結大学）

北東アジア

研究テーマ

機構内担当機関・協定締結大学

自然環境と文化・文明の構造

国立民族学博物館 北東アジア地域研究拠点〔中心拠点〕

域内連携体制の構築をめざす国際関係論

北海道大学 スラブ・ユーラシア研究センター

環境問題および地域資源に関する文化と政策

東北大学 東北アジア研究センター

持続的な経済開発

富山大学 極東地域研究センター

思想・歴史的アイデンティティ

島根県立大学 北東アジア地域研究センター

中国と周辺地域 ― 歴史的関係、
華人マイグレーション、対中意識の変遷

早稲田大学 総合研究機構現代中国研究所

現代中東

研究テーマ

機構内担当機関・協定締結大学

文化資源 個人空間の再世界化

国立民族学博物館 現代中東地域研究拠点〔中心拠点〕

人的資源（制度的側面）

東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所

人間の移動・交流によるネットワークの構築

中東イスラーム研究拠点〔副中心拠点〕

人的資源（非制度的側面） 中東的な〈公共〉の多元的展開

上智大学 研究機構 イスラーム研究センター

知的資源 穏健主流派の形成

京都大学 大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科附属
イスラーム地域研究センター

自然資源 環境問題と多元的資源観

秋田大学 国際資源学部

南アジア

研究テーマ

機構内担当機関・協定締結大学

南アジアの環境と政治

京都大学 大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科
附属南アジア研究センター〔中心拠点〕

南アジアの文化と社会

国立民族学博物館 南アジア研究拠点〔副中心拠点〕

南アジアの経済発展と歴史変動

東京大学 大学院 総合文化研究科グローバル地域研究機構
南アジア研究センター

南アジアの空間構造と開発問題

広島大学 現代インド研究センター

南アジアの文学・社会運動・ジェンダー

東京外国語大学 南アジア研究センター

南アジアの思想と価値の基層的变化

龍谷大学 人間・科学・宗教総合研究センター
南アジア研究センター



大学共同利用機関法人
人間文化研究機構

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構（人文機構）は、人間文化研究の各分野におけるわが国の中核的研究拠点、国際的研究拠点として、真に豊かな人間生活の実現に向け、学問的伝統の枠を超えて人間文化の研究を推進し、新たな価値の創造を目指します。

本機構は、人間文化研究にかかわる 6 つの大学共同利用機関で構成されています。

構成機関

- 国立歴史民俗博物館 歴博
- 国文学研究資料館 国文研
- 国立国語研究所 国語研
- 国際日本文化研究センター 日文研
- 総合地球環境学研究所 地球研
- 国立民族学博物館 民博

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
National Institutes for the Humanities (NIHU)

本部
〒105-0001 東京都港区虎ノ門4-3-13 ヒューリック神谷町ビル2F
Tel. 03-6402-9200 (代表) | [http:// www.nihu.jp/](http://www.nihu.jp/)

アクティビティレポート 2016-2018

2020年3月発行
発行：人間文化研究機構
編集・制作：総合人間文化研究推進センター
デザイン：toinoki
印刷・製本：株式会社ゼンリンブリンテックス

